

第9回北勢線の魅力を探る ～中津原の巨樹と寺社めぐり～

開催日 2007年9月17日（月・祝）

参加者 111名（内子ども1名）

協力 民話サークルやまどり、北中津原自治会長 伊藤昭朗さん
伊藤吉明さん、行順寺住職 田代俊孝氏

其原の道場と原神社

麻生田駅前では大勢の人ばかり。乗車区間が長かったので車内受付が多くてここでの受付は早く済んだ。集落の中の道沿いの小高いところに行順寺其原道場がある。ここには古い一石の五輪塔が1基ある。風化してしまっていて、読めないが、『員弁史談続編』には正安3年（1301）銘とある。桑員地方では最も古い部類の墓碑であろう。道場が出来る前にあった知足院を開基した実応和尚の墓石と伝えられている。



其原道場

原神社は其原の集落の一番高いところにある。其原の集落は2度移転しており、この神社も移転してきて、明治40（1907）年に現在地の天王の森に移って、集落を見下ろすようになった。明治の合祀により、牛頭天王（須佐之男命）、神明社（天照大神）などを祀った。

大榿と寝榿

山郷小学校前の交差点を斜め右に折れると、なだらかな起伏が緩やかにカーブする立派な道路を歩く。すると前方に雄大な景色が開けた。谷筋が集まったところに、これまた立派な南中津原橋が架かる。北に養老山地を背にして東に蓮華谷、西は小穴谷の溪流が、南下して員弁川に流れ込む迫力あるシチュエーションに、しばし汗をぬぐいながら武藤佳子さんの説明を聞いた。最後に訪れる行順寺で、今も語り継がれている「報恩水道」のお話に出てくるマンボは、この橋の西側の沢にあるそうだが、ここからは見ることが出来ない。



大榿

北中津原の伊藤吉明さん氏の屋敷には大榿がそびえている。幹周り5.5m樹高10m、樹幹は直径12～13mで「きのこ」のような形をした巨樹である。平安末期に植えられ、樹齢千年という。北勢町指定文化財第2号

になった。榧の実は古くから食料となり、最盛期には約6俵（360 kg）の収穫があったという。

もうひとつは通称「寝榧」とよばれる榧の森がある。北勢町指定文化財第1号に指定されている。幹周り1m前後の榧が数本、田畑の地面を這うように生育していて、この「寝榧の森」には、関が原の合戦に敗れた落ち武者が隠れ住んだという伝説もある。



寝榧

中原神社と行順寺

坂道の最高地点からやや下がった所に中原神社がある。地区の自治会長の伊藤さんの案内で、楼門をくぐり拝殿前の広場で説明を聞く。この神社の伝統行事で、正月第1日曜日に行われる“粥だめし”のお話に、耳を傾ける参加者が多かった。

コスモスが咲く道を下った先に修復を終えた立派な山門が目に入る。蓮華山行順寺である。浄土真宗大谷派。本堂に上がると同朋大学教授をつとめておられた住職の田代俊孝さんよりお寺の紹介があった。行順寺は平安時代初期の天長4年（827）



中原神社拝殿前

に空海によって開基されたと伝えられ、当初は真言宗の寺院であった。しかし、兵火によって焼失して一道場となった。文安5年（1448）11月、行順寺中興の祖と称される刑部坊空賢とその弟子正玄坊が上洛して本願寺の蓮如に帰依し、阿弥陀如来の尊形1幅を拝領、浄土真宗に改宗し、再興された。翌年の宝徳元年（1449）には蓮如が行順寺で4日間逗留したと伝わる。



行順寺太鼓堂屋根

報恩水道の絵本に用いられた原画の屏風を特別に展示していただいた。続いて「民話サークルやまどり」による報恩水道の紙芝居を披露してもらった。これで今回の散策が終了し、多くの参加者は境内で昼食をとった。あとは自由に麻生田駅に向かった。